

② ワールドカップサッカーの開催とスポーツ文化の振興

1―はじめに

横浜のスポーツを語るとき多くの市民の記憶に新しいのは、平成十年の市内アスリートチームの活躍による市民の盛り上がりであろう。箱根駅伝競走大会での神奈川大学の優勝、全日本大学ラグビー選手権大会での関東学院大学の優勝、松坂投手を擁する横浜高校の甲子園の春夏連覇、そして横浜ベイスターズの三十八年振りの優勝である。しかし、我々にとってはサッカーに関して忘れられない二つの出来事があった。一つは日本代表のFIFAワールドカップ初出場をかけたアジア地区予選の盛り上がりであり、いま一つは横浜をホームタウンとするJクラブ「横浜マリノス」と「横浜フリューゲルス」の合併である。

平成四年七月に本市が二〇〇二年FIFAワールドカップ（W杯）の国内開催地に正式立候補して以来ここ数年横浜のスポーツシーンはW杯を中心に回っていたといっても過言でないだろう（表）。

W杯の横浜開催は、横浜のスポーツ文化にどのような影響を与えるのであろうか。横浜スポーツの更なる発展のきっかけとするためには、どのような取り組みを進めるべきなのか。ここでは、健康体力づくり、達成感や楽

しみの享受、コミュニティづくりなどスポーツの多面的な意義に着目し、市民、地域とスポーツとの新しい流れを考えていきたい。

2―スポーツの意義

「スポーツは、体を動かすという人間の本源的な欲求に応えるとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びをもたらし、さらには、体力の向上や、精神的なストレスの発散、生活習慣病の予防など、心身の両面にわたる健康の保持増進に資するものである。また、オリンピックやワールドカップにみられるように、スポーツは、人間の可能性の極限を追求する営みという意義を有しており、競技スポーツに打ち込む選手

のひたむきな姿は、人々のスポーツへの関心を高め、夢や感動を与えるなど、活力ある健全な社会の形成にも貢献するものである」（文部省保健体育審議会「スポーツ振興計画のあり方について（中間報告）平成十二年六月」）。

スポーツの意義は、その価値を個人が享受する側面と社会が享受する側面に分けてとらえることができるが、スポーツ振興施策の実施にあたっては、この二つの側面をバランス

よく実現することが求められるのである。

ここでは、「する」「観る」「支える」というスポーツと人との関わり方を切り口として「スポーツの価値を個人が享受するとはどのようなことなのか」を明かにするとともに、「社会が享受する価値とはどのようなものか」について考えていくこととする。

① 個人が享受するスポーツの価値

人は、スポーツを自ら「する」ことにより、体を動かしたいという本源的な欲求を満たすとともに、爽快感や楽しさなど精神的な欲求を満たすことができる。また、記録への挑戦などをおし、達成感や喜びなどを得られるとともに、継続的にスポーツ活動を続けることにより、健康の保持増進や仲間との交流機会などを得ることができる。特に青少年は、責任感や他人への思いやり、コミュニケーション能力などを育成することができる。

次に、人は、スポーツ選手のひたむきなプレイを「観る」ことにより、感動や勇氣、元氣を得ることができる。また、サッカーの日本代表戦やJリーグでみられるように「観る」ことを通じて共通の関心事を持つ仲間を得ることができるし、プロ野球やJリーグのほかにも高校野球や箱根駅伝など地元の学校や選

1―はじめに
2―スポーツの意義
3―W杯開催の意義
4―終わりに

表一ワールドカップサッカー横浜決勝戦開催決定までの動き

平成4年7月	2002年FIFAワールドカップの国内開催地に正式立候補
平成5年1月	国内開催候補地15都市決定
4月	「2002年ワールドカップ横浜招致委員会」設立
7年3月	日本サッカー協会FIFAへ正式立候補申請書提出
11月	FIFA視察団の来浜
8年5月	日韓共同開催決定
7月	「2002年ワールドカップ横浜開催準備委員会」設立
12月	国内開催候補地10自治体の決定
9年5月	日本開催準備委員会会長への決勝戦開催要望書の提出
10年3月	横浜国際総合競技場のオープン
11年5月	FIFA視察団横浜国際総合競技場の視察
8月	JAWOC、横浜での決勝戦開催正式決定

手が出場する大会を観戦・応援することにより、地域への愛着心を得ることも可能である。さらには、友人や家族と一緒に観戦することや、友人・家族の出場する大会を観戦（応援）することにより、豊かな友人関係や家族関係を構築するきっかけを得ることも可能であろう。なお、青少年期にハイレベルなスポーツを観戦することにより、子供たちは、将来への夢や自らがスポーツを行うきっかけを得ることができると期待されるのである。

スポーツを「支える」とは、オリンピックやワールドカップ、国民体育大会などの大規模スポーツイベントやJリーグや地域のスポーツ大会などの運営を様々な場面でボランティアとして支援することを指すが一般的な活動することもスポーツを「支える」活動ととらえることができる。このようなスポーツを「支える」活動をとおして、達成感や満足感、他者への貢献など精神的な欲求を満たすとともに、仲間づくりの機会を得ることができるのである。

② 社会が享受するスポーツの価値

スポーツは、社会保障制度の維持への貢献、コミュニティ活動の促進、青少年の健全育成、高齢者の生きがいへの貢献、障害のある人の社会参加促進など健全で心豊かな社会の実現に寄与するものである。

多くの人が継続的にスポーツ・レクリエーション活動に親しみ、自らの健康を保持増進することにより、社会的には医療や介護など

社会保障にかかる経費の節減効果を得ることができると期待される。少子高齢化の進展に伴い、社会保障を必要とする層が増加し、これを支える層が減少することが見込まれるため制度破綻が危惧されているが、スポーツを振興し、生涯スポーツ社会が実現すれば、人々はヘルスプロモーションの理念に基づき自らの健康をスポーツ・レクリエーション活動をとおして保持増進でき、老人医療費が節減されるなどの効果が期待されるのである。

また、人間関係の希薄化による無関心層の増加や連帯感の欠如による地域社会の活力低下、コミュニケーション機会の減少による社会的な孤独感・孤立感など精神的ストレスの増大が、心豊かな活力ある社会の阻害要因となっているが、スポーツをとおして地域社会の活性化やコミュニケーション機会の増加をはかり、人々が心豊かな生きがいを感じられる社会を創造することが期待されている。地域におけるスポーツの振興は、地域住民の交流を促進し、地域の一体感や住民相互の連帯感を醸成するものであり、その結果、活力ある地域社会が再生されることが期待されるのである。また、継続的にスポーツを「する」「観る」「支える」機会が増加することにより、地縁によらない新たなコミュニティが創造され、多様なニーズに応えうる多様なコミュニティを持つた社会が実現するのである。

また、人が青少年期に身につけるべき資質には、責任感や他者への思いやり、多様な価値観を認める態度やコミュニケーション能力などがあるが、青少年期のスポーツ活動はこのような資質を育むものである。また、社会

が青少年に与えるべきものは、自らの将来に夢や希望を持って安心して生活できる環境であるが、スポーツは学校・家庭・地域の連携促進などをとおして、このような社会の実現に寄与するものである。

また、健康であるにもかかわらず定年後、地域社会に溶け込めず自宅に閉じこもりとなり、社会との接点がないまま孤独感や孤立感に苛まれている高齢者が問題となっているが、スポーツは、身近な地域での高齢者の仲間づくりのきっかけとなるものであり、高齢者の健康の保持、増進の効果だけでなく、他者とのコミュニケーションをとおした生きがいづくりに寄与するものである。

さらに、スポーツは誰もが「すること」ができ、楽しむことができるものである。パラリンピックの盛り上がりにもみられるように、近年、障害者スポーツに社会の関心が高まっている。障害のある人がスポーツを「すること」は、自らの健康増進や社会参加促進に効果があるだけでなく、社会の様々なバリアの除去やノーマライゼーションの推進に寄与するものである。スポーツが社会のあらゆる側面でユニバーサルデザインを実現する先導的な役割を果たすことが期待されるのである。

3 W杯開催の意義

ワールドカップはオリンピックと並ぶ世界最大のスポーツ大会であり、スポーツコンベンションである。コンベンションとは、多くの人が一定の目的をもって特定の場所に集うことと定義することができ、横浜市ではス

ポーツイベントもコンベンションと捉えている。この世界最大級のスポーツコンベンションを横浜で開催する意義は何なのか、改めて考えてみたい。

①「コンベンション」としての意義

ワールドカップの横浜開催により得られる効果としては、経済波及効果、シティーセールス効果による国際的な知名度の向上、国際理解・交流の促進、コンベンションへの市民理解の促進などの効果が期待されている。

二〇〇二年のW杯開催期間中には、国内・国外から観客のみならず多様な目的を持った人々が多数横浜を訪れ、様々な消費行動をとるのである。市内経済への波及効果については民間のシンクタンクが試算をしているが、W杯の開催が市内経済の活性化につながることは間違いないであろう。また、世界各国へW杯の情報が発信されることにより横浜の国際知名度が上がり、今後、会議や企業誘致などを外国で行う際にアドバンテージを得ることができる。横浜は決勝戦と国際メディアセンター（IMC）の誘致に成功したため、この効果は国内開催地の中でも圧倒的に高いものを得ることができるであろう。さらに、多様な文化を持った人々が世界各国から集うため、これらの人との交流をおして異文化の理解や国際交流の促進が期待できるのである。また、W杯に何らかのかたちで市民が参加することにより、コンベンションの意義に対する市民理解の促進が期待される。

②「スポーツ大会」としての意義

W杯の開催は、横浜のスポーツにどのような影響を与えるのであろうか。前節で明らかにしたスポーツの意義と照らし合わせ、ワールドカップの開催効果とワールドカップの開催を契機とした横浜のスポーツ文化の更なる発展について、今後、進めるべき取り組みとあわせて考えていきたい。

ア 横浜サッカーの振興

まず、「する」という側面で考えられるのは横浜サッカーの振興である。平成四年の立候補以来、横浜サッカー協会には決勝戦誘致やW杯ムーブメントの高揚に有形無形の協力を得ているが、ジュニアサッカーの振興やフットサル大会の開催、諸外国とのサッカー交流事業の実施など市民のサッカー熱は確実に高まっている。サッカー熱の高揚とともに個人がサッカーを「する」機会が増えているのである。しかし、参加チームが増えるとともに場の確保が難しくなっている現状があり、ワールドカップ後も市民のサッカー熱を持続させ、サッカーといえは横浜といわれるぐらいサッカーを振興させるためには、場の確保に向けた取り組みが必要である。

イ 興奮や感動の共有と新たな仲間づくり

次に、「観る」という側面では、興奮や感動の共有、新たな仲間づくり、そしてサッカーをはじめめるきっかけづくりが考えられる。世界最高峰のプレイをスタジアムで観ることに、多くの人が感動を得、その感動を共有するとともに、特に青少年にとってはサッカーをはじめめるきっかけとなったり、将来の夢や希望を得る機会となることであろう。平成十年のワールドカップアジア地区予選の際

には、みなとみらい地区に設置したテレビに多くの若者が集い、選手のプレイに一喜一憂し大いに盛り上がったが、今回も市民全員がスタジアムで観戦できるわけではないので、直接観戦できない多くの市民がワールドカップの興奮と感動を共有し楽しめるしかけづくりが大切である。また、過日、ユーロ二〇〇〇を視察してきたが、オランダ国民がナショナルカラーのオレンジに染まっていたのが印象的であった。服装のみならず顔や体にペインティングをほどこしていたのである。二〇〇二年には横浜がブルーに染まることを期待したいし、ペインティングがサッカー観戦の際の市民の楽しみの一つとして定着すれば、ワールドカップ後も横浜F・マリノスや横浜FCの試合が大いに盛り上がることだろう。

ウ スポーツボランティアの定着

次に、「支える」という側面では、スポーツボランティアの活用と定着が考えられる。W杯には多くの市民がボランティアとして参加し、大会の雰囲気を楽しむとともに自己実現など精神的な満足を得ることであろう。このボランティアたちがW杯後も活動を継続できるような仕組みづくりが重要である。そのためには市内で行われる様々なスポーツイベントにスポーツボランティアを積極的に導入するとともに、ボランティアが日常的に活動できる場を確保していく必要がある。

エ スポーツ文化の高まり

最後に、横浜のスポーツ文化に及ぼす効果について考えてみたい。スポーツは誰でもが楽しめるものである。平成十年の横浜ベイスターズをはじめとする市内各団体の活躍によ

る市民の盛り上がりからも分かるとおり、W杯の開催により市民のスポーツへの関心は確実に高まるであろう。この関心を一過性のものでせず今後の横浜スポーツの発展につなげていくためには、W杯を契機とした市民とスポーツとの多様な関わりを支援・育成していくことが重要である。例えば、W杯の機運を盛り上げるため、市内各所でフットサル大会などスポーツイベントやスポーツをテーマとした講演が開催されたり、サッカー以外の種目での韓国との交流が始まったり、W杯の開催を支援する組織が設立されたりしているが、これらの取り組みをワールドカップ後のスポーツ振興につなげていくことが求められるのである。また、フランス大会において日本のサポーターがブルーのごみ袋を持つて応援した後、周辺のごみを持ちかえり世界の注目を集めた。二〇〇二年大会でも大会会場の中のみならず、市民が市内で自発的に回収したごみをオリジナルグッズと交換するなどして、クリーンな街「横浜」を演出することなどが考えられないか。ワールドカップ後に市内で開催されるスポーツイベントでも同様の取り組みをすれば、スポーツの新たな楽しみ方が創出されるかもしれない。

オ スポーツクラブの発展

平成十二年八月、文部省保健体育審議会の最終答申が出された。その中では総合型地域スポーツクラブの育成が大きな柱となっている。総合型地域スポーツクラブとは、一定エリアの住民が会員となり、会員の会費により自主的に運営されるものであり、ここではあらゆる世代の人が、専門の指導者のもとで、自分のレベルや目的に応じて、多様な種目のスポーツに親しむことができることとされている。本市としても、市民の誰もが、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しめるよう生涯スポーツの振興に取り組んでいるところであり、総合型地域スポーツクラブの育成に向けた施策も検討しているところである。

スポーツクラブの育成に関しては、市内のサッカークラブの動静にも注目したい。横浜F・マリノスが今年度から実施している「ふれあいサッカー」プロジェクトは、サッカーを通じた新たな地域コミュニティづくりや健全で活力ある市民社会の形成を目的とし、このプロジェクトの着実な推進により市民の誇るスポーツクラブとして、より一層活動の幅を広げられることを期待している。また、シオ制度を導入した横浜FCについても、市

民との交流を深め、市民の誇れるスポーツクラブとして定着することを期待したい。この二つのスポーツクラブがそれぞれの特徴を生かしながら発展することは、横浜のスポーツ文化の進展に大きな意義を有し、市としても必要な支援をしていきたいと考えている。

4 一 終わりに

生涯スポーツ社会の実現が大きな目標となっているなかでW杯が開催されるが、このビッグイベントを横浜文化の発展に寄与させることが大切である。生涯スポーツの振興は市民生活を様々な側面で豊かにするものであり、スポーツの持つ多様な価値に注目してW杯を契機とした取り組みを進めていきたい。そのためには、職員個人がW杯の開催意義をよく理解し、各局区での特色ある積極的な取り組みが必要である。また今後、市民や職員の間でスポーツ振興やW杯の開催意義に関する議論がより一層活発に行われることを期待したい。

△教育委員会生涯学習部長▽

図一 スポーツ振興施策の体系

